

症例は8例である。50%生存期間は496日で、累積5年生存率は16.8%であった。

5年以上生存した4例を中心に臨床的検討を行い報告する。

## 第255回新潟外科集談会

日時 平成14年12月7日(土)  
午後12時30分～午後4時37分  
会場 新潟県医師会館  
大講堂(3F)

### 一般演題

#### 1 胃癌術後14年で卵巣転移をきたした一例

池田 義之・大橋 学・片柳 憲雄\*\*\*\*  
橋立 英樹\*\*\*\*\*・倉田 仁\*\*\*  
西倉 健\*・向井 玄\*\*・大橋 優智  
坂田 英子・田邊 匡・中川 悟  
神田 達夫・畠山 勝義  
新潟大学大学院消化器・一般外科  
同 分子・病態病理学分野\*  
同 分子・診断病理学分野\*\*  
同 生殖器官制御分野\*\*\*  
新潟市民病院外科\*\*\*\*\*  
同 臨床病理部\*\*\*\*\*

胃癌術後14年で発症し、免疫染色所見などを総合し卵巣転移と診断された一例を報告する。症例は51歳女性。37歳時胃癌で幽門側胃切除施行(低分化型腺癌, n1(+))。下腹部腫瘍を自覚し受診。内視鏡上異常所見を認めず。開腹所見で右卵巣とDouglas窩の腫瘍と、腹腔内に多数の白色小結節とを認め、残胃等に腫瘍認めず。右付属器切除施行され、病理で低分化型腺癌、印環細胞癌、及び胃型粘液形質の発現を認め、胃癌卵巣転移と診断。TS-1内服し、現在再燃なく外来通院中である。

#### 2 残胃全摘術後に発症した輸入脚症候群の一例

永橋 昌幸・内藤 哲也・佐藤 友威  
中川 悟・畠山 勝義  
新潟大学大学院消化器・一般外科

症例は68歳、男性。1994年、当科で胃体部癌(tub2 > por2, mp, n0)に対して胃垂全摘, D2リンパ節郭清, およびB-I法再建術を施行した。以後外来にて経過観察されていたが、2002年8月12日上部消化管内視鏡検査にて残胃小湾側に径約3cmの褐色調なIIc病変認め、生検で腺癌、深達度はMと考えられた。残胃癌Stage IAの診断で10月10日残胃全摘, D1リンパ節郭清, およびRoux-en-Y再建術を施行した。前回の手術のため、高度な癒着も認めた。

術後9病日より腹痛を訴えるようになり、12病日頃より上腹部の膨隆が認められるようになった。腹部エコー検査にて、輸入脚の著明な拡張を認め、輸入脚症候群を疑いCT検査を施行した。空腸空腸吻合部あたりに狭窄が疑われ、10月22日緊急手術を施行した。空腸空腸吻合部付近で著明な癒着を認め、輸入脚症候群を発症したものと考えられた。癒着剥離により通過障害は解除された。同じような通過障害が起こることが予想されるため、および、減圧のために輸入脚へ逆行性に腸瘻を造設した。術後経過は順調である。

#### 3 胃全摘術後Roux-en-Y 挙上空腸に穿孔を認めた1例

榎本 剛彦・下山 雅朗・齋藤 六温  
厚生連魚沼病院外科

症例は72歳男性。2年8ヶ月前に胃癌にて胃全摘術施行。激しい腹痛のため救急車にて来院。ショック状態を呈し、下腹部中心に圧痛、反跳痛、膨満を認めた。US, CTで胸水腹水、腹腔内遊離ガス像を認め、消化管穿孔による腹膜炎と診断し緊急手術を施行した。腹腔内には混濁した腹水と食物残渣を多量に認め、Roux-en-Y 挙上空腸が左横隔膜下に落ち込んだ部位で穿孔していた。穿孔部とY脚を含め空腸を約20cm切除し、再度Roux-en-Yにて再建した。術後DIC, 創感染等の

合併症が出現したが63病日退院。病理所見上、空腸穿孔部に炎症所見や悪性像等の穿孔を来す原因は認められなかった。

【まとめ】胃癌に対する胃全摘 Roux-enY 挙上空腸の穿孔により、腹膜炎を生じた1例を経験したので報告した。

#### 4 十二指腸狭窄を伴う進行癌に対する胃空腸吻合術 — 曠置的胃腸吻合法の試み —

北見 智恵・田宮 洋一・二瓶 幸栄  
丸山 聡

県立吉田病院外科

【はじめに】十二指腸狭窄を伴う進行癌に対し、胃空腸吻合術が行なわれるが、期待した結果を得られないことが多く、曠置的胃腸吻合法などの工夫が試みられている。

【対象】1996年から2002年まで腹膜播腫症例を除いた胃癌以外に対する胃空腸吻合術8例を対象とした。通常の胃空腸吻合術(A法)6例と曠置的胃腸吻合法(B法)2例を比較検討した。

【結果】A法は膵癌4例、十二指腸癌2例、B法は十二指腸癌1例、大腸癌リンパ節転移1例で3分粥開始日はそれぞれ平均9.1日、5.5日であった。A法で3例は経口摂取不十分のまま退院となったが、B法では2例とも全粥を半分以上摂取可能であった。術後在院日数はそれぞれ64.1日、14.5日であった。

【結語】曠置的胃腸吻合法の試みについて報告した。

#### 5 肝転移か、原発性肝内胆管癌か？ 膵癌術後4年目の症例

岡本 竹司・早見 守仁・大橋 泰博  
佐藤 攻

信楽園病院外科

症例は72歳の女性。平成10年7月29日、膵頭部癌に対して幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。平成13年8月より腫瘍マーカーが上昇し、9月21日の腹部CTにて肝S7～S8境界に細

い楔状のLDAを認め、平成14年8月20日の腹部CTにおいてS8に径1.0cm大のtumorが認められた。

平成14年10月16日、拡大肝右葉切除術、胆道再建術を施行した。病理は高分化型腺癌を呈しており、門脈域に著名な浸潤像が認められた。術前精査で肝転移と原発性肝内胆管癌との鑑別が困難であった症例を経験したので報告する。

#### 6 当院における大腸癌の転移性肝癌に対する肝切除症例の検討

小林久美子・若桑 隆二・植木 巨  
石塚 大・木廣 敬祐・杉本不二雄\*  
刈羽郡総合病院外科  
杉本医院\*

【目的】当院での転移性肝癌に対する肝切除症例の治療成績を検討すること。

【対象・方法】1993年より肝切除を施行した33人39件を対象とし、背景、予後につき検討した。

【結果】性別は男性20例、女性13例であり、平均年齢63.0歳であった。原疾患の局在は結腸が21例、直腸が12例であり、原疾患病期はDukes Aが3例、Bが7例、Cが23例であった。肝転移出現時期は同時性は19例、異時性が20例であった。肝転移切除後の3年生存率は63%、5年生存率は54%であった。

#### 7 総胆管に発生した腺内分泌細胞癌の一症例

加納 恒久・黒崎 功\*・小林 孝  
松尾 仁之

新潟臨港総合病院外科

新潟大学大学院消化器・一般外科\*

症例は60歳女性。既往歴に特記事項なし。黄疸で発症し当院内科受診。腹部超音波検査で総胆管に高エコーを呈する腫瘍を認め、これによる閉塞性黄疸と診断され入院となった。精査により中部胆管癌と診断。肝転移、遠隔転移は認めなかった。根治切除可能と診断され幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。病理診断はⅡb病変を伴う結